

提出締切：2010年5月20日（木）

2008年度採択 学内提案公募型研究推進プログラム「基盤的研究」 研究成果報告書

|       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 研究代表者 | 所属機関・職名： 産業社会学部 教授<br>氏名： 仲間裕子 |
| 研究課題  | 近代美術における視覚の変容—作品と思想からの考察       |

### I. 研究計画の概要

研究の計画について、概要を記入ください。

近代化の流れのなかでさまざまな「視覚の変容」—世界観の変容—が生じた。しかし美術史・美学研究において重要な意味をもつこのテーマは、従来フランス美術、主にマネなど印象派の視覚の「断片性」(ピカソなどの20世紀前半の抽象美術へと展開)の観点からの研究が進められてきたにすぎない。本研究は、この印象派以降成立した「視覚の変容」という定説に対して、19世紀前半のドイツ・ロマン主義の画家、カスパー・ダーヴィット・フリードリヒの絵画に焦点を置き、作家・作品・観者の視覚性を分析し、その近代性を指摘する。その際、視覚の論点だけでなく、人と自然、人と環境、人と科学技術などの領域を含め、近代における世界観の変化がいかに視覚の変容と関わっているかをめぐり、視覚性と思想の両面から取り組む。ドイツの美術館や研究機関での作品/文献調査を行い、また従来からのドイツ人の研究者との研究交流を発展させることによって、研究の深化を試みる。

### II. 研究成果の概要

研究成果について、概要を記入ください。

研究成果の一部を「自然を発見する?—ロマン主義的表象の再考—」(『思想』、岩波書店、2009年10月号)および「Rethinking the Aesthetics of Nature as a 'Global' Vocabulary: Discourse of Romantic Representation」(国際美学学会コロキウム、於：アムステルダム大学、2009年10月)として発表した。

以上の研究成果報告においては、とくにフリードリヒ絵画に見られる「視覚の変容」がドイツ・ロマン主義思想および崇高の概念、パノラマ、あるいは鳥瞰的視点という時代が生んだ新しい視覚への関心を要因としていることを指摘した。については、まず、フリードリヒの風景画《海辺の修道士》(1809年頃)の空間構築のハインリヒ・クライストとクレメンス・ブレンターノによる代表的な批評を、前者の「まぶたを切り取る」、後者の「中断」という特異な表現に着目して、近代的視覚の断片性と観察者に課された自然からの乖離の析出と解釈した。こうして作品に見られる断片的、批判的特徴の思想性を指摘し、さらにこれをフリードリヒ・シュレーゲルの「断片」と「アイロニー」の観点、および18世紀のバーク、カントの崇高思想の受容と解釈した。ただし、空、海で構成されるほとんど「無」の空間に対峙する畏怖の念の表現は、カントよりも、緊張感を伴う「現前性」に注目したバークの崇高論に近いと解釈する。に関しては、当時流行したパノラマやアルプスの山岳画の極端な鳥瞰的視点に見られる、「視野」の拡大への時代的関心のダイナミズムを挙げ、とくに《大狩獵場》(1832年)の流動的な風景描写の特質の意味を分析した。望遠鏡、双眼鏡などの視覚機器の開発や、蒸気船や鉄道の敷設など時代のスピード感の作品への反映を見、これまでドイツ・ロマン主義美術において重視されてきた「精神性」や「宗教性」、あるいは現実逃避やセンチメンタリズムに対して、近代的表象としてのフリードリヒの風景画を論じた。

本ページはホームページに公開いたします。1ページに収めてください。